

# 東海地域の言語実態調査（4）

## その2 名鉄名古屋本線沿線の言語意識・文法・ことばの印象

A field-survey project of Tokai dialects (4):  
Grammatical features and dialect perception along the Meitetsu Nagoya Line

吉田健二 青山昂央 赤川未奈 石神陽花 大野藍子  
川原帆花 川原龍真 倉知澄聡 小島 恵 榊原優惟  
佐橋もえ 鈴木美咲 田中綾乃 中村友美 宮地萌衣  
永井美妃

キーワード：東海方言、愛知県尾張地方、愛知県三河地方、名鉄名古屋線、方言意識

### 1. 本稿の目的など

愛知淑徳大学文学部国文学科「国語学演習」では、2014年度より「学外教育活動」として言語調査を実施しているが、2018年度より同一の項目による継続的な調査を開始し、吉田健二・他（2019、2020、2023）で結果報告をおこなった。本稿では2023年8～9月に名古屋鉄道名古屋本線沿線の4区・5市（愛知県名古屋市市中村区から岡崎市）でおこなった調査の結果を中心に報告する。吉田・他（2024）で語彙項目の調査結果を報告した。本稿では文法・意識・印象項目の結果を報告する。話者などの情報については上記別稿に記載したので、そちらをご参照いただきたい。

### 2. 結果

#### 2.1. グロットグラムの構成

結果を主にグロットグラムでしめすが、その構成についても吉田・他（2024：89）を参照されたい。ここでも要点だけを述べると、横軸には各話者を名鉄名古屋本線の営業距離にしたがって、ただしそれぞれの生育地から最寄りの（名鉄線の）駅の位置においてある。縦軸は2023年10月1日時点の満年齢である。

#### 2.2. 意識項目：地域帰属意識（図1）

2017年度から自身のことばの地理的背景・地域帰属・地元方言への好悪や使用についての意識を調査している。ここではそのうち、地域帰属意識項目の結果をのべる。今回の話者はすべて愛知県在住・生育の方で、「お住いの地域は「尾張」「三河」のどちらだとおもうか」という



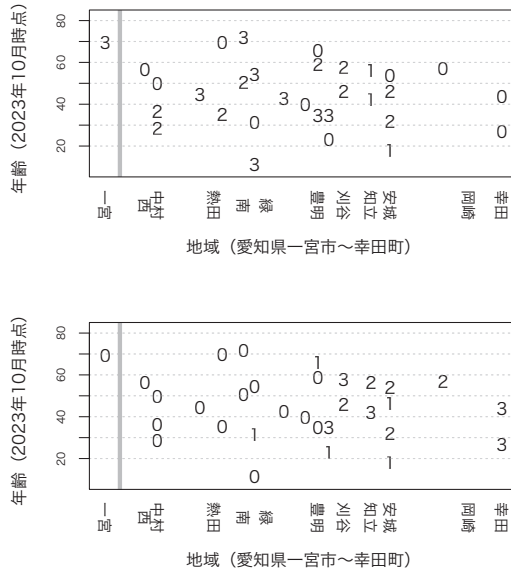


図2 やさしい命令「～ヤー」「～リン」の使用  
(3調査文の「使う」の数：上～ヤー；下～リン)

## 2.4 断定辞をふくむ形式 (図3)

2020年度のWeb調査から3種類の調査文により断定辞をふくむ形式をしらべている。昨年度の調査では岐阜県側(東濃地方)がヤ、愛知県側(春日井市)がダをふくむ形式にかなり明瞭にわかれた(吉田・他2023:11-12)。「明日はお花見だよね」については、調査地が愛知県のみ今回はダヨネが圧倒しており、他もダガネ・ダガンネで、愛知におけるダの優勢が確認できる。岐阜などでみられる断定辞ヤをもつ形式は三河側に散見しており、この理由はいまのところ不明である。

一方、「あんたのせいで怒られたじゃない」についてはダをもつ形式はほとんど回答されず、尾張側でガをふくむ形式、三河側でジャンが優勢である。先行研究でこれにちかいはGAJ149図「あそこは、…たぶん静かだらう」だとおもわれるが、そこでは尾張側でダロー、三河側でダラーが優勢である。調査文はこれと mood が異なり直接の比較はできないが、ダをふくむ形式の回答はおおくない。ガまたはジャをふくむ形式が優勢な傾向は前年度の岐阜東濃～愛知春日井でもみられており(吉田・他2023:11-12)、話者の認知をもとめるこの用法については前項のたんなる断定とはことなる形式がもちいられる傾向がつよいらしい。ジャンはくだけた共通語場面でももちいられる形式であり、尾張側にも回答がみられる。調査ではスライドで調査文をしめしているが、この項目では問題の箇所を「あんたのせいで怒られた( )」と空欄にしており、調査方法により話者が誘導されたものではない。GAJ17図「東京に行くのではないか」ではジャをふくむ形式が愛知県全般にみられるが(ンジャ(ー)・ジャ・デヤ)、この質問文についてはこの部分にガ/ジャという地域の対立がみられたことは

注目に値する。ただし、前節のヤーとおなじく、三河側にもガをふくむ形式が回答され、両地域のことなりは程度差にとどまる。なお、断定辞をふくむもう一つの「今日雨だよ」はダヨが圧倒するが、尾張側にダデ（南70）、三河側にダラ（岡崎40）と、それぞれ地域特有とみられる形式の回答が一件ずつあった。glottogram は省略する。（大野・宮地）

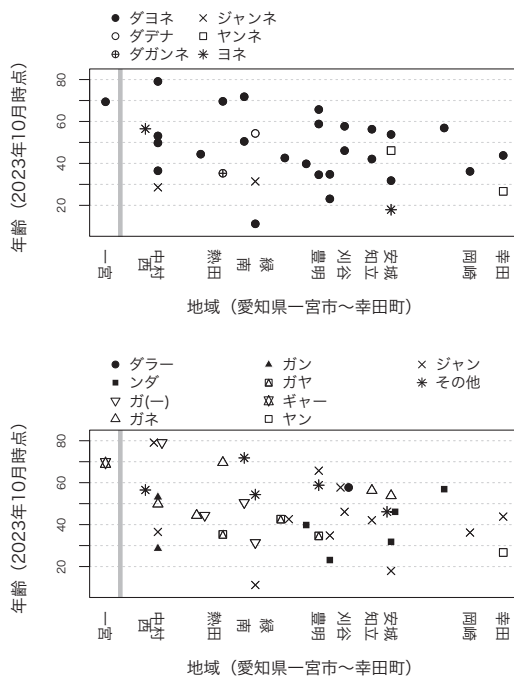


図3 断定辞をふくむ形式：  
上「明日はお花見だよ」下「あんたのせいで怒られたじゃない」

### 2.5 否定形をふくむ形式（図4～7）

否定形をふくむ項目は、動詞の単純否定形「しない」「来ない」「見ない」、過去否定形「食べなかった」「行かなかった」、禁止の「しないでよ」、条件の「しなかったら」、不可能形の「読めない（能力・条件）」「遊べない（条件）」を調査している。このうち以下の項目は今回の調査地全域で以下にしめす回答が圧倒していたので、glottogram は省略する：「遊べない」アソベン；「行かなかった」イカンカッタ；「来ない」コン。

動詞「する」の否定形をふくむ形式は、いずれについても過去の報告とおなじく、センではなくシンと（上）二段活用化傾向を示唆する形式（塗りつぶしの記号）が優勢である。昨年度調査でもおなじ傾向を報告したが（吉田・他 2023：13-14）そこでのべたとおり、共通語のシナイの知識に支えられた、したがって若い世代により顕著な傾向だとみられる。

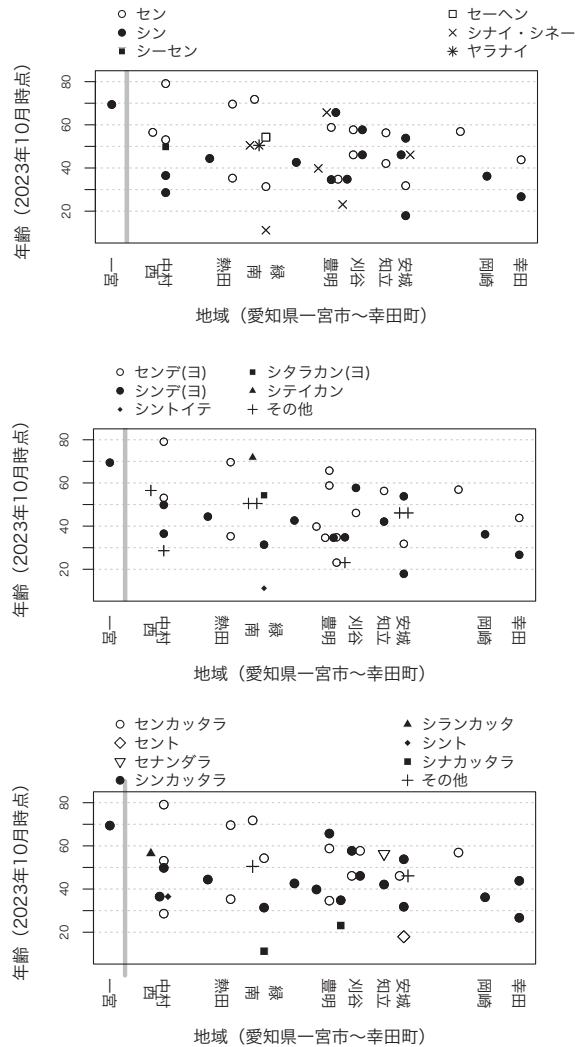


図4 動詞「する」の否定形をふくむ形式：  
上「今日は仕事をしない」中「怪我をしないでよ」下「勉強をしなかったら…」

つぎに動詞「見る」の否定形をみる。調査地全体でミンが優勢で従来形のミーヘン、ミーセンが尾張側に4名(中村50、南50-1、豊明50、豊明60)とかたよりをみせるが、三河側最西端の刈谷40、刈谷50からも得られた。この傾向は「来ない」にもみられ、尾張側の4名からコーヘン、コーセン、コーシンが得られたのに対して、三河側でも刈谷50、安城10からコーヘンが得られた。「遊べない」も上記のとおりアソベンが全域で優勢だが、尾張側にアソバーセン(中村50)、アソバーヘン(南30-1)の回答があった。「しない」も図4のとおり、尾張側にシーセン(中村50)、セーヘン(南50-1)の回答がある。GAJ83図「10時になってまだまだ来ない」(本稿もおなじ調査文)で尾張西端と隣接地にコーセンがあるのと整合し、やさしい命令(2.3節)でみたのと同様、尾張側で優勢な語形が三河側にとりいれられた結果とみることができる。

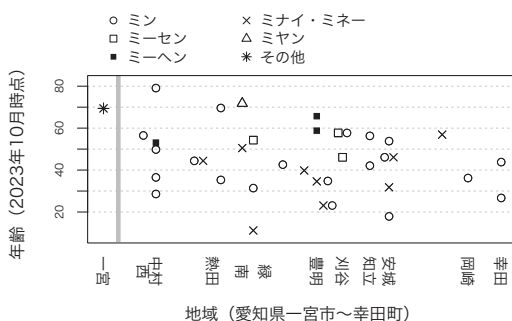


図5 「食事中はテレビを見ない」

動詞の過去否定形のうち「食べなかった」を検討する。タバシカッタ（一部タバレンカッタ）が全域的に優勢だが、尾張側にタバナダの回答があった（一宮 60、緑 40、西 50 と南 30-1 の第二回答）。「行かなかった」でも上記のとおりイカンカッタが全域的に優勢でイカナンダの回答は3件のみ（西 50 と刈谷 50、知立 50 の第二回答）。GAJ151 図「行かなかった」ではイカナンダが近畿を中心とした広域で優勢で、『新・日本言語地図』72 図でイカンカッタが勢力を増しているが、現在それより若い世代でこの傾向がすすみ、ナンダを構成要素にもつ従来形は中年層以上に若干みられるという状態なのだとおもわれる。

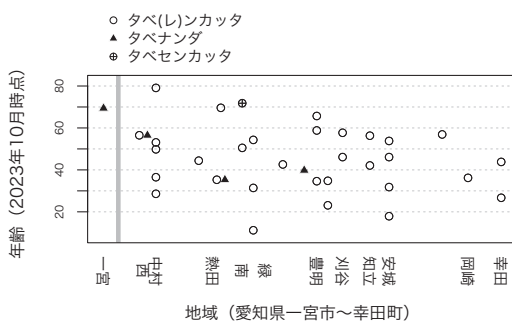


図6 「今日は時間がなくて朝ごはんを食べなかった」

最後に、動詞「読む」の不可能形の結果をみる。能力可能・状況可能（いずれも GAJ とほぼおなじ質問による）ともに全域的にヨメンがつよいが、数人からヨーヨマンが回答された。GAJ182 図（能力可能）では今回の調査地全域でヨメン・ヨーヨマンの併用が報告されている。また GAJ183 図（状況可能）では三河をふくむ広域がヨメンなのに対して、名古屋をふくむ尾張 2 地点がヨーヨマンだった。この地域については能力可能でヨーヨマンがより優勢になる状態だったとおもわれるが、今回の結果はそこからヨメンがより優勢になった状況とみることができる。このように先行研究でも尾張地域にかたよる傾向がみられたヨーヨマンがやはり三河西端の刈谷から回答されている。

ところで、GAJでは愛知尾張地方のさらに西での存在が報告されるヨメーヘンが、尾張の話者から回答されている。近接する近畿方言の影響によるとも推測されるが、今回の話者でヨメーヘンを回答したのは高年層の方々で、GAJの年代よりは一世代以上若いとはいえ、当該地域固有の特徴である可能性もかんがえられる。上述の「遊べない」のアソベーセン、アソベーヘンや、ミーセン、コーヘンも考慮に入れると、そもそも尾張地域の話者の言語知識にもとづけば可能な形式であり、これまでの調査でたまたま得られなかっただけで、他の形式と併存していたのではないかと推測する。(青山・川原龍・永井)

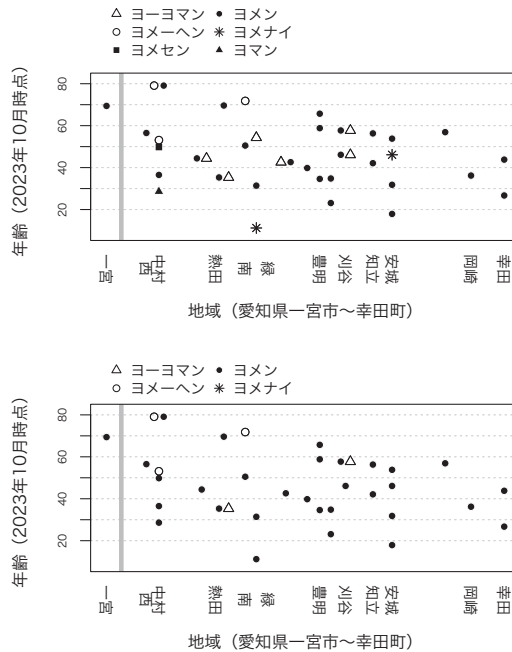


図7 「読めない」:

上「難しい漢字が多くて読むことができない」下「灯りが暗くて読むことができない」

## 2.7 その他 (図8、9)

2018年度から調査している「散る」の継続相・完了相の対立の結果をのべる。調査方法などはGAJ、『新・日本方言地図』のFPJDのものとおなじである。吉田・他(2023:10-11)で報告した岐阜東濃～愛知春日井では、継続・完了をことなる形式によって区別しない回答の話者が23名中7名だったが、本年度の調査では34名中28名とおおい。その場合前回とおなじく、いずれもチットルあるいはチッテルだった。ことなる形式を回答した6名中、3名がチットル/チッチャッタ、2名がチッテル/チットル、1名がチットル/チッテマッタで、昨年度の岐阜側の話者からあった継続のチリョールの回答はなかった。『新・日本言語地図』105, 106図によればチットル(あるいはチリョール)/チッテシマッタの類による区別が予測されるが、この対立をみせる回答をしたのは年輩の話者にかたよる(中村70、南70、南50-1、安城50)。岐阜や隣接する尾張北部とくらべると、両アスペクト形式の対立は維持されない傾向にあるよ

うだ。

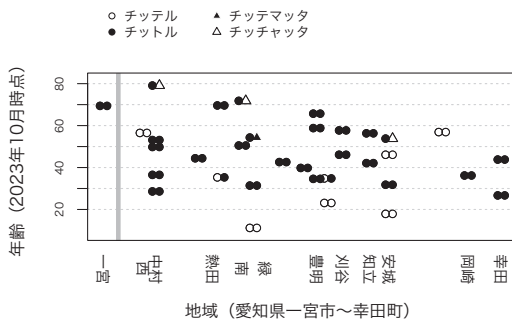


図8 「散る」のAspect形式：上 継続相；下 完了相

最後にGAJでも調べられている「田中という人」の調査結果をのべる。GAJ32図ではトユー、チュー、ツチューが拮抗しているが、そこでは全国的におおくないッテ、ッテユーが優勢で、(ツ)チューは50歳代以上から回答されたのみだった。この形式については全国共通的な形式への移行がすすんでいるようである。(吉田)

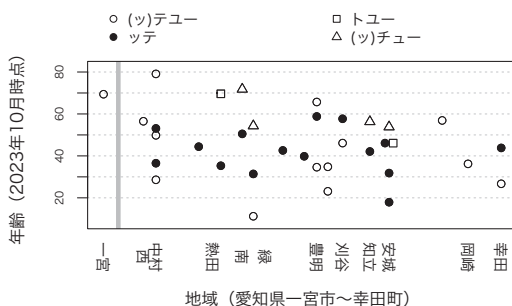


図9 「田中という人 (が来た)」

## 2.8 ことばの印象

### 2.8.1 やさしい命令「～ヤー」「～リン」

この両形式の使用の地域差については2.3節で述べたが、これにくわえて、その形式を自分に言われたり、傍で聞いたりしたときの印象を表1の4種の評価語についてそれぞれ5段階でたずねている。表1左列の評価語は大きい値(5)のものであり、小さい値(1)はこの逆の「きつくない」「かわいい」「都会っぽい」「ていねい」である。～リン、～ヤーそれぞれ、尾張・三河地域(豊明以西と刈谷以东：N=18 / 14)の平均値を記載した。両形式について、地域による印象のちがいがあるかどうかをt検定(Welchの方法)によって検討した結果を添えてある。おおくの評価語について明瞭な差はないが、統計的にも明瞭でおそらく意味があるとおもわれるのが、左欄の上から2つめ、～リンの形式をそれを使用しない尾張の話者の方が使用する三河の話者よりも「かわいい」と感じる傾向があることである。以前から繰り返し確認されてい



表1 やさしい命令の印象(1~5):尾張・三河地域の平均値(網掛けは地域間の差が有意;  
\*\*\* $p<.001$ , \* $p<.05$ )

	～リン		～ヤー	
	尾張	三河	尾張	三河
5の印象				
きつい	4.1	3.8	3.6	3.6
かわいくない	2.7	***3.6	3.9	4.1
田舎	4.3	4.6	3.8	*4.4
ぞんざい	4.1	4.2	4.0	*4.3

る傾向で、母方言で使うということは、使われ方を、使う人物、場面などを具体的に知っていることであり、そこではかならずしも「かわいくない」言い方だと理解・意識されている。一方、母方言で使わないため通常耳にすることがすくない話者はことばの響きのみによって、「わりとかわいい言い方ではないか」と感ずる傾向がある。

これよりは弱い、したがって再現性や重要性は小さいと推測される傾向が～ヤーの形式を三河の話者の方がより「田舎っぽく」「ぞんざい」だと評価する傾向である。2.3節でみたとおり、三河の話者にもこの形式を使用する話者が若干いるので、評価のちがいがあってもそれは際立たないと推測される。また、リン、ヤーともに「田舎っぽく」「ぞんざい」という評価(4~5)になっているため、明瞭な差が得られる可能性は低いとおもわれる。

### 2.8.2 バカ・アホ・タワケ

最後に吉田・他(2024:86-87)で使用と「キツさの印象」を報告した、バカ・アホ・タワケについて、印象の地域差を報告する。表2にこの3語の「キツさ(9段階:大きい数字が「キツい」)

表2 卑罵語3種の印象(1~9):地域ごとの平均値

語	尾張	三河
バカ	4.7	5.6
アホ	3.5	4.6
タワケ	3.8	****7.0

上記別稿でも述べたとおり、印象には個人差が大きく、意味のある傾向は見出しがたいが、一つだけ明瞭なのが、タワケについて三河話者が尾張よりもうんと「キツい言い方」だと感じているらしいことである。これも上記のリン/ヤーとおなじで、タワケを使用しない三河話者にとって、使用するか身近で耳にしな

じみのある尾張話者よりも、自身に使われたときに強い印象をうける言い方になるのだとおもわれる。ここでの両地域の差も統計的に有意である(Welchの方法のt検定: $p<.00001$ )。(吉田)

## 3. 総合考察

2023年夏に名古屋鉄道名古屋本線に沿って実施した調査の結果を本稿と別稿(吉田・他2024)に分けて報告した。本節では両者の知見の総合をこころみる。別稿で、全体として地域差がみとめられた項目がおおく、旧来の地域特有の語彙やその改新形についても概略「尾張vs.三河」という地域対立がみられたと述べた。くわえてこれについて、松田(2019)が指摘する、岡崎方言における(かつての名古屋方言への志向を経た)岡崎方言への回帰傾向を参照し、今回の結果にみられた三河に対する尾張地域のことばの独自性がこの傾向を尾張側から裏

付けるものであり、両地域のことばの差異が一部について明瞭になる傾向が生じている可能性を示唆するとかんがえた（吉田・他 2024：74）。本稿では文法項目を中心に検討したが、やはり「尾張 vs. 三河」という対立をしめす項目が少なくなかった。ヤー／リンの対立（2.3 節）、「…怒られたじゃない」のガをふくむ形式（2.4 節）、否定を含む形式の「…ーセン（シン）」の形式、不可能の「ヨー…」の形式（2.5 節）がこれにあたる。上記別稿で、愛知県内で地域間のことばが一定の差異をしめす（つよめる）傾向が存在する可能性を推測したが、本稿で検討した項目の結果からもその可能性が高まったようにおもわれる。別稿・本稿で見出した傾向を暫定的に整理すると以下ようになる。

- (1) 尾張地域：近畿方言の影響を地続きで受容する。その一方で、従来の尾張方言を一部改新しつつその一方で、従来の尾張方言を一部改新しつつ保持する。
- (2) 三河地域：尾張地域の影響下から脱却して独自性（東との連続性）をつよめる。
- (3) 境界地域では尾張方言の三河側への進出が認められる。この逆の傾向はみられない。

glottogram やこれをもとに論じた結果からあきらかなように、(1)、(2)の対立はあくまで程度問題であり、両者のことばには連続性が認められる。2.2 節でみたように、地域帰属の対立意識は両地域、とくに三河側で非常に明瞭だった。しかし、ことばのレベルでは両者は差異（化）をしめしつつも連続しており、帰属意識とことばの差異とのあいだには一定のズレが存在することも確認できた。また、(3)のように、そのズレはあるていど一方的であり、三河側のよりつよい独自意識とは逆になっているかのようなのである。この点、昨年度調査で、岐阜東濃側のことばを愛知側が受け入れているらしいこと（吉田・他 2023：19-20）との共通点がある可能性がかんがえられ、未調査の近隣地域を調査し、これまでの調査結果と総合してさらに検討する意義があるとおもわれる。

#### 4 付記：話者からの要望について

調査終了後、ある話者とお話する機会があった。その際、「以前から疑問に思っていて、専門家にたずねたいと思っていた」と持ち出された内容があり、記しておきたい。その話者はTVなどでのインタビューで、話者が「…考えてあげれるんだけど…」「起きて来れんもんでさー」など、いわゆるラ抜きことばを使用しているにも関わらず、字幕で「考えてあげられる」「起きて来れん」のように修正するのが不満だとのことである。愛知県生育・在住であるその話者の認識ではラ抜きことばは話しことばではすっかり定着しており、使う人は少なくないのに、なぜそれをTV局が勝手に変えてしまうのか、ということであった。筆者（吉田）はこの意見に全面的に賛成で、おおいに励まされた。

TVでは、（おそらく第一義的には）視聴者の理解の支障にならないようにという理由で、そのまま表記したのでは理解が難しい、あるいは標準的な表記法による表記が難しいことばの表記を変更することはあるようである。しかし、ラ抜きことばは理解の支障になるとはかんがえ難い。ラ抜きへの変化の開始時期がはやく（三宅 2019）、その後の進行もかなり徹底している（吉

田・他 2022: 130-131) 東海地方の話者がこのように感ずることはとても自然である。ことにさまざまな地域の人をあえて取り上げて発言をお願いする類の、いわゆる「地域情報」のような番組において、インタビューに応じてくれた人のことばを正当な理由もなく変更することは適切ではないだろう。

問題の変更の理由は未確認だが、ラ抜きことばを変更せず文字化して放送することによって受けるかもしれない批判を回避する目的で行われていると想像する。近年、他者のことばに対する寛容さに欠ける風潮が認識され、専門家グループから「分かり合うコミュニケーションを心がけよう」という趣旨の提言がしめされている(文化審議会国語分科会 2018)。この小委員会の委員で、放送のことばに関する研究者でもある塩田雄大氏は近著で「自分とは異なることばづかいや考え方を一方的に否定・非難するふるまいを目にすることもあります。そういうのはもうやめにしませんか」と述べている(塩田 2023: 003)。そのとおりでと思うが、ならば本稿のような意見表明も差し控えるべきだろうか。しかし、上記の変更は、他者のことばづかいを「変更されるべきもの」として否定することになってはいないだろうか。それは、上記専門家たちが提言する態度とはかけ離れたものではないだろうか。その提言が向かうべき先は、他者のことばに目くじらを立てる人々ではないのだろうか。さらに、発話の変更をうけた人たちの背後には、上記の話者のように、自身の話しことばではそれが通常の言い方である、という人々がいるのである。

最近では徳島を特集したドキュメント番組でもラ抜きの変更がみられており、方針が徹底しているのだとおもわれる。放送関係者はここで紹介するような声が聞こえて来ない(クレームを出すことが少ない)だけである可能性も考慮に入れ、この話者のように、一部地域の人が憤慨するような変更を慎むよう検討していただきたいとおもう。

**謝辞** 話者の紹介、日程調整、調査会場の利用などについて、以下の諸機関のみなさまにお世話いただきました：中村区夢づくり実行委員会、あつた宮宿会、名古屋市南区役所地域力推進室、熱田神楽保存会、名古屋市緑生涯学習センター、豊明市社会福祉協議会、刈谷市文化観光課、知立市役所経済課、安城市民交流センター、21世紀を創る会・みかわ。また、ご参加いただいた話者のみなさまからは、この他にも貴重なお時間をいただいております。この研究は、愛知淑徳大学の「学外教育等活動」予算による助成を受けています。

## 参考文献

- 大西拓一郎・編(2016)『新・日本言語地図－分布図で見渡す方言の世界－』東京：朝倉書店  
岸江信介・清水勇吉・峪口有香子・塩川奈々美(2017)『近畿言語地図』徳島：徳島大学日本語学研究室  
小林園佳(2021)「三河方言くりん／いん」の三河地域出身者における使用実態について－「エ

- セ方言」は地域に流入しているのか－』『言語の研究』（東京都立大学言語研究会）9：47-60.
- 塩田雄大（2023）『NHK 調査でわかった日本語のいま 変わる日本語、それでも変わらない日本語』世界文化社
- 文化審議会国語分科会（2018）『分かり合うための言語コミュニケーション（報告）』
- 松川芽衣・水野友裕・安井望恵・吉田健二（2021）「愛知県若年層方言の地理的分布の傾向：尾張北部・尾張三河境界・渥美半島地域の Web 調査から」『愛知淑徳大学国語国文』44：114-134.
- 松田謙次郎（2019）「岡崎敬語調査に見る「足りない」～「足らない」の変異と変化」『計量国語学』32(2)：66-81.
- 三宅俊浩（2019）「近世後期尾張周辺方言におけるラ抜き言葉の成立」『日本語の研究』15(3)：1-17.
- 山田敏弘（2017）『岐阜県方言辞典』岐阜：岐阜大学
- 吉田健二（2022）「愛知・首都圏方言の対照 地域帰属意識と言語使用」『愛知淑徳大学国語国文』45：122-136.
- 吉田健二・他（2018）「東海地域における方言使用と印象」『愛知淑徳大学国語国文』41：167-198.
- 吉田健二・他（2019）「東海地域の言語実態調査(1) 第一次計画と2018年度調査結果」『愛知淑徳大学国語国文』42：176-208.
- 吉田健二・他（2020）「東海地域の言語実態調査(2) 愛知県尾張地域と三河地域のちがいを中心に」『愛知淑徳大学国語国文』43：173-192.
- 吉田健二・他（2023）「東海地域の言語実態調査(3) 愛知県春日井市～岐阜県東濃3市のことばの連続・不連続」『愛知淑徳大学論集－文学部篇－』48：1-22.
- 吉田健二・他（2024）「東海地域の言語実態調査(4)：名鉄名古屋本線沿線調査の語彙」『愛知淑徳大学国語国文』47:72-92.